

皆さん、おはようございます。まずは、皆さんが元気に登校してくれたことをとても嬉しく思います。

始業式の講話の前に、文化祭の公開について再検討し、新型コロナウイルスの感染状況を考え、当初の予定より規模を縮小し午前中ご家族のみの公開としたこととお詫びします。規模縮小は残念で申し訳なく思っていますが、一昨年昨年に比べて、できることは確実に増えています。仲間と協力して皆さんの力で創造しうる最高のパフォーマンスを見せてほしいと思います。期待しています。

さて始業式にあたり、今日は少し私自身の話をしたいと思います。

「思い」は人をつくり、人生をつくる。「思いは実現する」というお話を折に触れてさせていただいていますが、これは、2年前に亡くした私の母が生前よく私に言ってくれていたことでもあります。

私の母は、若くして母親と兄を病気で亡くしました。そして弟や妹の面倒を見ながら家計を助けるために大学進学をあきらめ、就職したそうです。母は学ぶことが大好きで大学に行きたかったと言っていました。しかし、行けなかった。それでも母は、裁縫、手芸、着付けなどを学び、その講師の資格を取得し、晩年は俳句など、学びたいと思ったことを次々と学び続けました。「新しいことを知ること」、「できたらいいと思うことをできるように努力すること」が楽しい、とよく話していた母の思いが表れた一生でした。

さて私はというと、けっして最初から高い理想をもって教師を目指したわけではありません。中学、高校、大学と、本当にやりたい職業が見つからず、大学に進むまでは、ただ、自分が知りたいと思ったことが学べそうな分野時には消去法で選択していました。大学では、教員免許状は取りましたが、その時点でも強く教師になろうと思っていたわけではありません。ただ、大学生活では知りたいことを調べ、本を読み、考え、考えたことを表現する楽しさを味わいました。そうして、学ぶことの楽しさ、面白さを若者に伝えたいという思いが自分の中で強いことから、最終的に教師という職業を選択しました。今から振り返ると、漠然とした思いでしたが、なりたい自分、実現したいことを見つめ、それができる道を選択していたのだと思います。そして選択に迷うたびに、自分が本当にしたいこと、心の底から願うことを見つめ直し、「思いは実現する」という母の言葉に救われてきたように思います。

私の人生の大きな転機は、23才のときでした。大学を出て、とりあえず教師という職業を選択はしたものの、当時まだ講師だった私は、先生と呼ばれていていいのか自信がもてず、先生を続けるか悩みました。そんなある日、ある先輩教師が、「おまえは教師に向いているよ」と言ってくれたのです。そして、何かをなそうとするときは、自分は「できると信じること」が大切で、できるかできないか迷いながら中途半端な気持ちで臨むくらいなら、やめてしまったほうが良いと話してくれたのです。その話を聞いて私は迷いを断ち切りました。自分が良い教師になれるかどうか迷うのではなく、よい教師とは何かを考え、理想の教師に近づく努力をすると心に決めたのです。それから日々、弱気になり自分に負けそうになるたびに、負けるな、諦めるなと自分に言い聞かせるようになりました。以来30年以上、時代の変化や経験を重ねる中で少しずつ姿を変えながらも、私の中で「理想の教育」の探究は今もずっと続いています。

人は自分の未来に、常に確信をもてるわけではありません。誰だって不安です。だからこそ、その時々を考えうるベストな自分に向かって努力すると心に決め、自分を信じることで未来が開けるのだと思います。過去と他人はコントロールできませんが、未来と自分は今この瞬間から自分で変えられます。

8月末に京セラという会社の創始者で私の尊敬する実業家の稲盛和夫さんが亡くなりました。その稲盛さんの次の言葉を紹介します。

「人は自分が信じてもないことに、努力できるはずがありません。強烈な願望を描き、心からその実現を信じることが、困難な状況を打開し、ものごとを成就させるのです。」

みなさん、具体的な目標がある人はその実現に向けて、今はまだ漠然とした理想しか思い浮かばないとしたら、そこに近づくためのステップを、今心に思い描き、抱くことができる最高の自分、理想の自分をイメージして、けっして諦めることなく、そうなれると自分を信じて精一杯進んでほしいと思います。

皆さんを心から応援しています。